こんげつのブックマーク ② EX

まだ関ヶ原の匂いが残る時代
剣も頭も冴えわたる藩士の成長譚

『波乱 百万石の留守居役(一)』
『思惑 百万石の留守居役(二)』
上田秀人

取材・文＝呉 玲奈　写真＝迫田真実

『波乱 百万石の留守居役（一）』

ときは江戸前期。大老・酒井雅楽頭忠清は、徳川第四代家綱亡き後の将軍に、外様の加賀藩主・前田綱紀を候補に立てる。「徳川か、前田か」揺れに揺れる江戸城内、そして加賀藩。綱紀の重臣・前田直作を護衛する任を命じられたのは若き藩士の瀬能数馬だった。今、数馬の運命は大きく動き出す——。待望の大型シリーズの第一作。

講談社文庫　693円

『思惑 百万石の留守居役（二）』

「外様の加賀藩主、前田綱紀を次期将軍に」さまざまな憶測や情報が飛び交うなか、参勤交代で上京中の藩主の命を受けて、重臣・前田直作は江戸に向かう。同行するのは加賀藩屈指の剣の遣い手・瀬能数馬。次々と襲いかかる刺客。道中最悪の難所、碓氷峠で待つ敵。一行は危機を切り抜けられるのか。手に汗握る時代活劇の第二作。

講談社文庫　693円　12月13日発売予定

『あまちゃん』や『半沢直樹』の例を出すまでもなく、ヒット作の後はやりにくいと感じるか、上がりに上がった期待値が糧となるか。作り手は2タイプに分かれる。時代小説人気を牽引する作家の一人、上田秀人はどうやら後者らしい。

「前作『奥右筆秘帳』シリーズは、現時点で私の代表作といえるまで育ってくれました。でも同時に、新しい世界を生み出したいという願いも強く湧いてきた。作家の業でしょうか」

新シリーズ『百万石の留守居役』からは、「時代小説はもっとおもしろくできる」という気概が力強く伝わってくる。

本作は「徳川四代将軍家綱の余命がわずか三カ月」と、ときの大老・酒井雅楽頭忠清が報告を受けるシーンで始まる。家綱亡き後の五代将軍にと、酒井雅楽頭がひそかに白羽の矢を立てたのは、なんと最大勢力を誇る外様大名・加賀百万石の藩主である前田綱紀だった。

「この時代の外様大名たちは、徳川家に対し、複雑な心境だったと思います。なにしろ、関ヶ原の戦いまでは家康と対等の関係だったのに、三代家光で家臣扱いになったのですから。

たぶん、おじいちゃんの膝で『俺は関ヶ原で、槍で敵を突いて倒したんだ』などと、合戦体験を聞いて育った、最後の世代だと思うのです。だからこそ、外様の矜持は強かったはず。徳川家に『次の将軍になれるんだから、藩主を差し出せ』と言われても、おいそれと従えない。反対論が噴出して当然でしょう」

そんな「関ヶ原の匂いが残る」江戸時代を、外様の藩の視点をからめて描いてみたかったと上田は話す。

江戸時代最大の外様藩、百万石を誇る加賀が舞台

舞台を加賀藩にしたのは、能登出身の装画家、西のぼるに誘われて金沢に訪れたのがきっかけだった。西は、独特のやわらかい色遣いで、上田の文庫のカバーをはじめ、数多くの歴史小説を彩っている。

「江戸、京都、大阪から遠い金沢には、独特の文化があると感じました。『北陸の小京都』と呼ばれますが、源流は京都でも、京都のコピーではない。文化をしっかり受け入れて、醸成させている。加賀百万石のプライドを、今でも街全体がもっている」

加賀が百万石の石高を誇る大藩になったのは、名君として知られる、第五代藩主・前田綱紀の功績（作中では四代と数える）が大きい。取材を重ねるにつれ、前田綱紀に仕えた家臣の一人、前田直作が浮かび上がってきた。

「この直作の家がおもしろい。NHKの大河ドラマ『利家とまつ』で有名になったまつこと芳春院の、直系の子孫に当たるんです。記念館には芳春院からの手紙が多く残されていて、彼女がこの家を重視していたことが伝わってくる」

聡明で名高いまつの血を色濃く引く前田直作は、序盤のキーパーソンだ。「藩主の前田綱紀を徳川将軍にすべきかどうか」、意見が割れた藩内で直作は孤立し、対立する派閥から命を狙われる。その直作を護衛するのが、主人公の瀬能数馬だ。

「斬らない剣豪」が藩の〝外交官〟に大抜擢

瀬能数馬は、これまで上田が描いてきた主人公とはやや趣が異なる。香取神道流の流れを汲む剣の達人でありながら、なかなか刀を抜かないのだ。

「数馬は、どうしても斬らねばならないとき以外は、相手と剣を交えない。チャンバラは時代劇の華です。この斬らないシーンをどれだけ盛り上げられるかは、自分なりの挑戦です」

斬らない剣豪は、交渉に言葉を尽くす。その姿は、周囲の人々の心の琴線に触れていく。

主人公の数馬は、物語が進むにつれて大人物に育つであろうと予感させる器の持ち主だ。そして、その瀬能数馬が任命されるのが、タイトルにある「留守居役」なのだ。

よほどの江戸通でない限り、この役職を聞くのは初めてではないだろうか。これまでの小説でも、上田は知られざる職業にスポットライトを当ててきた。

「留守居役の主な仕事は、幕府や他藩の情報収集や交渉。わかりやすく言えば、藩の外交官のような存在です」

数馬が仕える加賀藩をはじめ、外様の藩が最も警戒すべきは、徳川幕府による「外様潰し」の施策だった。幕府の意向をいち早く察知するためには、情報収集が不可欠だ。藩から江戸に送り込まれた留守居役は、江戸城内の噂話に耳を傾け、他藩の動向に目を配る。

「テレビの時代劇で、悪代官に黄金の小判入りのまんじゅう箱を渡すあの人が留守居役です（笑）。いわゆる悪役のイメージが強いですが、有能でないと務まらないお役目です」

留守居役は花街をしばしば利用した。今に例えるならば、吉原は銀座のクラブの位置づけだ。なじみのホステス（女郎）による行き届いた接待で相手との関係を深め、秘密を聞き出す。必要とあれば、留守居役は経費を制限なく使えたそうだ。

「当時、吉原は社交場でもありました。美貌と教養を兼ね備え、女郎たちのトップに立つのが花魁です。いずれ数馬にも、なじみの花魁ができる。本作ではそんな花魁をヒロインの一人に据えて、その人物背景もしっかり描いていくつもりです」

金と色を操って情報戦に臨む留守居役。上京したばかりの数馬もその例外ではない。俗世間の荒波にもまれて、若く清廉な藩士が成長していく姿は、読み応えがあること間違いない。

おきゃんな婚約者と遠距離恋愛 通信手段は手紙だけ

11月に第一巻、続いて12月に第二巻。連続の刊行スケジュールは、なんと上田自身からの提案なのだという。執筆は厳しかったが、夢中になって筆が進んだ箇所があるらしい。

「瀬能数馬の婚約相手、琴は書いていて楽しい。気持ちが乗ってしまいます」

数馬の上役の娘にあたる琴は、気が強くてバツイチ。藩の命運をかけた任務にあたる数馬を、陰から盛り立てる。

「腹が黒いというか、自分で考えて決断できる女性です。いわゆるお飾りじゃない。琴は自分の居場所を作りたいと願っている。夢と希望をかなえたい」

数馬と琴の会話は、軽妙でほほえましい。おきゃんな琴にかかっては、すご腕の剣豪もリードされっぱなしだ。

「数馬が江戸で留守居役になると、二人は遠距離恋愛になります。やりとりは手紙のみ、タイムラグがある。噂だけが先行することもある。そして、距離があるからこそ、あらためて数馬は琴の魅力に気づくことも」

江戸と加賀の遠距離。障害のあるなかでの、二人の恋の行方も目が離せない。

「琴の性格を考えると、相当ひねくれた文章で愛を伝えるはずなんです。行間に万感を込めた手紙の表現が難しくて」

高いハードルを自分に課してしまいました、と上田は頭をかいた。

共通点があるからのめり込む 時代劇というの名のファンタジー

「江戸は、現代以上に理不尽が多い時代でした。その最たるものが武士です。刀を帯びているにもかかわらず、他人を斬ったら自分が切腹しなくてはならない。戦国時代の武士なら、人を斬るのに禁忌なんてありません。でも江戸は違う。人を殺す職業の侍が、殺してはいけない時代に生きる。矛盾のなかで、武士はつねに自分の存在意義を問うていたことと思います」

上田の時代劇の登場人物は、誰もが悩み、欲をもち、その生観』、佐伯泰英先生の『佐伯史観』、作家によって時代のとらえかたは異なる。後発の僕が、同じ見方をなぞってもおもしろくない。『上田史観』で、読者の方々に新しい人物像を見つけてもらえたなら、望外の喜びです」

そしてこれも自分だけの歴史観かもしれないが、と上田は前置きしてから続けた。

「自民党が政権を奪い返した今も、日本ではやっぱり〝お上〟が権力を握っている感覚がありますよね。日本という国の下に企業があって、その下でサラリーマンが働く構造。江戸時代に作られた日本人の根本は、現代でもさほど変わっていない」

通底する価値観があるからこそ、約300年前の江戸時代の話であっても、私たちは登場人物たちに引きつけられる。

「僕は、時代劇は〝剣と魔法のファンタジー〟だととらえています。剣はチャンバラ、魔法は印籠。時代劇を読んでいるあいだは、好きな登場人物に感情移入して、ファンタジーの世界にどっぷり入り込んでいただきたい。読者のみなさんが浸れる舞台を作り出せたら、作家という商売は成功なんです」

うえだ・ひでと●1959年、大阪府生まれ。大阪歯科大学卒業。97年小説CLUB新人賞佳作。歯科医師との兼業作家になる。『孤闘 立花宗茂』で第16回中山義秀文学賞受賞。「奥右筆秘帳」シリーズは、09年『この文庫書き下ろし時代小説がすごい！』の第1位に。他の著書に「御広敷用人 大奥記録」シリーズなど多数。